

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520286

研究課題名（和文）

1800年前後のドイツ文学における「感性的なもの」と言語をめぐる考察

研究課題名（英文）

On "Aesthetic" and Language in German Literature about 1800

研究代表者

亀井 一（KAMEI HAJIME）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00242793

研究成果の概要（和文）：18世紀合理主義において、事実は、視覚的イメージによって表象することによって、認識されると考えられていた。しかし、18世紀後半になると、視覚化されない非合理的なものが問題になる。機知は、アラベスク紋様と同様、自律美学の注目すべきモデルとされたが、無意識的なものの表出としては、事実上、18世紀的芸術観を超えていた。さらに、言葉に言い表しがたいものを表現しようとする試みを通して、表現されるものと言葉の関係の恣意性が意識されるようになった。

研究成果の概要（英文）：In the Rationalism of the 18th century, facts were thought to be comprehended as representations of visual images. But in the latter half of the 18th century, irrational matters, which are never visualized, became a problem. Wit, like arabesques, was considered to be a remarkable paradigm of autonomic art. In fact, it was beyond the aesthetics of the 18th century, since it is an expression of the unconscious. Furthermore, as a result of trying to express things that are difficult to express with words, awareness arose of the arbitrariness of the relation between significant and signifié.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：ドイツ文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ドイツロマン派、ドイツ啓蒙主義、視覚体験、描写、機知、メタファー、アラベスク、無意識

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、『エクフラシス あるいは、解読者の物語—リヒテンベルクからジャン・パウルへ』（『ドイツ文学論攷』（阪神ドイツ文学会）48号、2006、49-67）において、語り手の主体性を消去しようとしたリヒテンベルクの銅版画解説を、語り手の虚構

性を前面化し解説をパロディにしたジャン・パウルの木版画解説と対比し、視覚イメージを言語化しようとするならば、必然的に、語り手の主体が生成されると主張した。視覚芸術のシステムは、言語と隣接してはいるものの、両者の対応関係は恣意的である。この観点をさらに進めて、感覚的なものがどのよ

うに言語化されるのかを考えたいと思った。

(2) 啓蒙主義は、知的、合理的な世界理解を目指していたが、しかしまたその探求の過程で、非合理的なもの、理解しがたいものに直面することになった。バウムガルテンが曖昧とされる感性に注目して、『美学』を出すのが、1750年。1783年には、モーリッツ編集の『経験心理学のための雑誌』の刊行が始まる。無意識的なものに対する関心が高くなっていることが判る。

(3) 社会的に見ると、1800年前後はドイツ市民社会の台頭期にあたる。領邦に分断され、政治的にはまったく無力だった市民階級が独自の文化を形成したのは、私的な領域においてであったと言われる。私的な領域は、本来、公にされないものであり、暗い領域である。そのような領域が一定の社会的な役割を果たしたのは、文学というメディアがあったためであった。このモデルは、本研究テーマに転用できるかもしれないと考えた。

(4) ハンス・ブルーメンベルクの提唱する「メタフォロジー」は、メタファーの働きを分析することによって、理解しがたい現象がどのように概念化されるかを明らかにしようとする試みで、本研究でも参照できる。その他、ロマン派における美的なものについては、ボーラーの研究もある。

## 2. 研究の目的

(1) 言い表しがたい感性、感覚がどのような言語表現となっているのか、その際、メタファーがどのように働いているのかを明らかにする。

(2) 感性的なものをめぐる考察(美学)が、1800年前後の哲学、特に、カントの批判哲学に対して、どのような意味をもっていたのかを明らかにする。

(3) 経験心理学を手がかりに、同時代に、無意識的なものがどのように考えられていたのかを明らかにする。

(4) 文学において、言語表現の限界がどのように意識化されていたのか、限界を意識することがどのような意味をもっていたのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 視覚的イメージと言語の異質性については、レッシングの『ラオコオン』(1766)以降、さまざまな文脈で言及されている。本研究では、K・Ph・モーリッツの芸術論(特に、『芸術作品はどの程度まで記述されるか』1788/89)、H・クライストによるフリードリヒ『海辺の僧』批評(1810)の読解を通して、言語描写の限界が意識化されてくる過程を追跡した。

(2) 視覚以外の感覚、特に、触覚の働きについては、1694年にロックがモリヌクス

問題を提起して以来、18世紀を通して議論された。モリヌクス問題というのは、生まれつき目が見えなくて、触覚によって立方体と球体を区別していた人が、突然、目が見えるようになったとき、視覚によって、立方体と球体を区別することができるかどうかという問いである。ロックは、経験論の立場から、視覚と触覚の生得的な照応関係を否定したのだが、この問題は、後に、視覚を中心とする世界像、人間の感覚の限界を問い直す契機となる(J・G・ヘルダー『彫塑』1778)。「目の見えない人」のモチーフはジャン・パウルのテキストを本研究テーマと関連づける有力な手がかりにもなった。

(3) 本来体験できない死をどのようにイメージするべきか、どのように語るができるのか。これも1800年前後のテーマだった。

① レッシングは、論文『古代の人びとは死にどのような形をあたえたのか』(1769)で、眠りの兄弟という死のイメージを発見した。バロック時代に一般的だった骸骨としての死が、この世の空しさ、死の恐ろしさのアレゴリーだったとすれば、眠りとしての死に表れているのは、死、そして生に対して肯定的な世界観である。しかしさらに、ヘルダーのレッシング批判(1786)を参照することによって、この死のイメージの変化を、象徴機能一般の問題として捉え直すことができた。

② 死後の世界がどうなっているのかという問題は、キリスト教の世俗化にともなって、領域を超えたテーマとなった。スウェーデンボルグは、天上界を幻視して、聖書の真意を伝道しようとした。カントのスウェーデンボルグ批判(『視霊者の夢』1766)は、天上界の認識の可能性そのものを問題にする。カントの批判哲学とともに、人間の認識の限界がどのように考えられていたのかを考える手がかりになった。この関連で、ジャン・パウルの終末論的な夢文学『宇宙の妙高より死したキリストの語る神はいない』の演説(1796)も参照した。

(4) 装飾紋様としてのアラベスクが、この時代の芸術、文学論で論じられるようになったことは、興味深い(ゲーテ『アラベスクについて』1789、モーリッツの『装飾論に向けての先取りの考察』1995、カント『判断力批判』1790 第一章16節など)。アラベスクは、古典的模倣理論では説明のつかない芸術様式だった。抽象的紋様は、具体的な形象を表示していないという点で、クライストの『海辺の僧』批評(1810)に通じる要素がある。とりわけ、Fr・シュレーゲルが、『文学についての会話』(1799)で、ジャン・パウルの機知表現をアラベスクに喩え、近代文学の特徴をそこに見ているのは注目に値する。アラベスクは、「目の見えない人」のモチーフとは

ちがった側面から、視覚的表象の限界を考察する手がかりとなった。

(5) 意識化されない感覚印象は、無意識に隣接する。言語と無意識の関係については、フロイト理論を参照した。無意識がテーマになるのもやはり、1800年前後であり、概念そのものは、ジャン・パウルの『美学入門』(1804)でも用いられている。ジャン・パウルの機知論の可能性と限界を明らかにするために、『美学入門』第二部の機知論とフロイトの機知論(『機知 — その無意識との関係』1905)を比較した。

#### 4. 研究成果

(1) 18世紀は啓蒙の世紀と言われ、「光」で象徴される。この時代の直観形式は、「枠付けされた見方」であり、対象から距離をとり、視野を限定して、精密にモノを捉えることによって、客観的な描写を目指たとされる(A・ランゲン:1934)。本研究のテーマである不分明な感覚や感性は、多くの場合、このような明確な視覚イメージが崩される、あるいは、歪められるという形で表現される。

① レンズの比喩は、この時代に流行した自然観察を反映しているばかりでなく、対象を焦点化し、明確な像を結ぶという点で、18世紀の視覚体験の象徴と見なすことができる。スウェーデンボルグのような神秘主義者もレンズの比喩によって、幻視を説明している。しかし、ジャン・パウルクライストのテキストでは、レンズが対象に焦点を合わせることのできなかつたり、虚像を映し出したりしている。

② アラベスクは、18世紀ロココ様式の主要素でありながら、18世紀のテーマであった対象の描写(模倣)をもっとも逸脱しているという点で、興味深い。カント、モーリッツ、Fr・シュレーゲルは、それぞれの構想からアラベスクに言及しているが、いずれも自律美学を目指しているという点で共通している。しかし、アラベスクには、現実世界を超えて、無意識に通じる要素がある。シュレーゲルは、ジャン・パウルの機知をアラベスクとの類比で論じているが、言葉遊びとしての機知と無意識の関係は、フロイトも注目している。

(2) カントの『視霊者の夢』は、スウェーデンボルグ批判を通して、形而上学の可能性を探ったテキストであり、批判哲学への過渡期に位置づけられている。時期的には、カントのバウムガルテン『形而上学』講義や、その講義に触発されたと思われるヘルダーのバウムガルテン『美学』研究、後に『彫塑』としてまとめられるヘルダーの触覚論(『批評の森第四部』)と重なっている。ここでも、形而上世界の存在を否定する合理的推論では、レンズの比喩が使用されている。一方、形而上世界の存在の可能性は、視覚=意識の

外にあるとされる(『視霊者の夢』では、すでに道徳的な世界が暗示されている)。ヘルダーの場合は、いっそう明確に、下位認識(触覚)が、合理的な世界の限界を超える通路として捉えられている。

(3) 経験心理学は、性格論が中心テーマになっているため、言語論的なアプローチが難しかった。そこで、直接、フロイトと比較しながら、1800年前後に、無意識がどのように捉えられていたかを考察することにした。ジャン・パウルの機知論は、美的な効果を主題化することによって、類似を発見する能力としての機知という伝統的な定義にはない観点を提示した。しかし、ジャン・パウルの無意識を取り上げるのは、物質と精神の間に類似を発見する能力としての機知をめぐる議論において、つまり、伝統的な機知概念の枠内においてであった。ジャン・パウルの構想には、「抑圧」の概念が欠けていた。一方、ヘルダーは『古代の人びとは死にどのような形をあたえたのか』において、古代の死のイメージに、死を隠す働きがあるとした。ヘルダー自身の意図が何であれ、ここには、フロイト的な無意識のメカニズムを見て取ることができる。なお、経験心理学については、次回の科研テーマ(『1800年前後のドイツ文学における「ドッペルゲンガー」形象の生成をめぐる考察』:課題番号 25370354)の枠で改めて取り組む。

(4) ヘルダーは『古代の人びとは死にどのような形をあたえたのか』は、レッシングの同名の論文に対する批判を契機にして執筆された。レッシングは、「眠りの兄弟」という美しいイメージによって、中世、バロック期における骸骨のイメージを更新した。それは、死生観(死に対する恐怖、生の空しさ)そのものの更新でもあり、ゲーテは『詩と真実』において、この観点から、レッシングの業績を称讃している。しかし、象徴という観点から考えるならば、本来のものごとを代理で表すという機能そのものについては、骸骨と眠りの差異は微少である。ヘルダーが、イメージに隠す機能を洞察したことは上述したとおりであるが、さらに、本来のものと代理するもの関係が恣意的であることを指摘している。ここには、アレゴリーからメタファーへの移りゆきが明確に示されている。

無意識の意識化の過程が、アレゴリーからメタファーへの移りゆきに併行しているという知見が、本研究の到達点である。このテーマを立証するには、さらに多くの事例研究が必要となるが、それは、本研究の枠を超えている。

その他、評価すべき点は、ジャン・パウルの機知論をめぐる考察である。本研究は、このテーマについて厳密な解釈を提示している唯一の邦語文献である。ただ、フロイトの

機知論との関連では、ジャン・パウルの理論を積極的に位置づけることができなかった。テーマの周辺を探ることによって、ジャン・パウルの機知そのものの意味を明らかにすることが、今後の課題となった。アラベスク、枠といった視覚芸術の周辺現象については、近年、ドイツでも新たな研究が進んでいる。今回は萌芽的な考察の域を出ることがなかったが、今回の成果をさらに展開する可能性を検討する。経験心理学をめぐる調査については、上述のとおり、次回のドッペルゲンガー研究で成果にまとめる予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 亀井 一、フロイトの機知論とジャン・パウル『美学入門』、大阪教育大学紀要、査読無 (印刷中)
- ② 亀井 一、ジャン・パウルは死にどのような形をあたえたのか (第 III 報) —啓示について—、大阪教育大学紀要 ([http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/27407/1/KJ1\\_6102\\_017.pdf](http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/27407/1/KJ1_6102_017.pdf))、査読無、61 巻 2 号、2013、17~27
- ③ 亀井 一、1800 年前後のエクフラシスについて—詩がもはや絵のようでないとするなら、言語による再現はどのように成立するのか—、ドイツ文学研究 (日本独文学会東海支部学会誌)、査読有、43 巻、2011、13~24
- ④ 亀井 一、Hybride Schnoerkel oder rein aesthetische Arabesken? Jean Paul in der Ornamentdebatte seiner Zeit, Schauplatz der Verwandlungen. Variationen ueber Inszenierung und Hybriditaet. Hg. v. Kazuhiko Tamura, Muenchen 2011, 査読有、199~214
- ⑤ 亀井 一、ジャン・パウルは死にどのような形をあたえたのか (第 II 報) —アレゴリーについて—、大阪教育大学紀要 ([http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/25439/1/KJ1\\_5902\\_015.pdf](http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/25439/1/KJ1_5902_015.pdf))、査読無、59 巻 2 号、2011、15~26
- ⑥ 亀井 一、ジャン・パウルは死にどのような形をあたえたのか (第 I 報) —死の視覚的メタファーについての—考察—、大阪教育大学紀要 (<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/7519/1/KJ572100001.pdf>)、査読無、57 巻 2 号、2009、1~15

[学会発表] (計 3 件)

- ① 亀井 一、ジャン・パウル『美学入門』を通してフロイトの機知論を読む、ドイツ現代文化研究会、2013 年 2 月 9 日、名古屋市立大学
- ② 亀井 一、ジャン・パウルは死にどのような形をあたえたのか、公共性研究会、2012 年 5 月 2 日、大阪教育大学
- ③ 亀井 一、Arabeske oder Web? - Zur Hybriditaet in Jean Pauls Texten、日本独文学会第 51 回文化ゼミナール、2009 年 3 月 27 日

[その他]

ホームページ等

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kamei/aesthetik.htm>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

亀井 一 (KAMEI HAJIME)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：00242793